

## 読者の声

### 北海道自然保護協会の役割と目指すべき方向

阿部 學

(NPO 法人 ラブタージャパン(日本猛禽類研究機構) 理事長)

その昔、北海道の無人島に上陸したとき、人の恐怖を知らない海鳥が足の踏み場もないほどに卵を抱き雛を育んでいた。この光景に出会った時、自分が彼らを守ってやらなければと固く決意したものだった。これを機に貴協会員になった。時を経て、国民の自然環境に対する関心は高まり、生きものを全く顧慮しなかった開発事業がカエルやバッタにまで注意を払うようになった。今日を迎えたのは、協会の各種啓蒙活動が功を奏したことば否めない事実で高く評価している。ただ、我が国の置かれている環境下において、果たして掛け声だけの精神論で自然が守れるのだろうか？

我が国には、野生生物を対象とした國の研究機関がない。同じ生きものでも経済的価値のある鯨、魚類などはある。欧米では、野生鳥獣の経済的価値を正当に評価して公的な研究機関を持っている。動植物を含めた自然環境を健全に管理する上で、科学的データなしの行政はあり得ない。護れ守れコールの結果がトキ・カワウソの絶滅であり、シカ・イノシシ・サルの天井知らずの増加である。そして外来生物法を制定する一方で、中国産トキに莫大な税金を投入するといった矛盾を国家事業として推進している。まさに鳥獣行政無策を絵に描いたようである。

協会の目指すべき方向は、國に研究機関の設立を働きかける一方で、自らがデータを生産してそれに基づいた行政を働きかけ、事業者に具体的な提言をすることである。瀕絶滅種を守るために制定した略称「種の保存法」対象種である猛禽類の世界を垣間見てみよう。共存を謳って事業現場で行われている調査は、環境省のマニュアルに基づいて、一事業で年間、数千万円から数億円をかけて双眼鏡で眺めることだけである。その結果、得られる成果は色とりどりの飛翔の軌跡図である。居並ぶ専門家はこれを眺めながら、事業の影響予測・評価を行い保全策を提言している。実態は飛跡図を眺めて影響を想像しているに過ぎず、保全策は調査結果と何ら脈絡のない、よかれと考えた策でしかない。曰く、非繁殖期の工事、低騒音・

低振動型重機の使用、作業員の隠蔽など。事業が完成したあとは生息環境は荒らされ、住めなくなっている。世界広しといえども双眼鏡で絶滅危惧種を救った例を知らない。

国に能力がない今、協会は範を垂れデータを収集し解析し具体的な保全策を提言することが求められている。総会の場で、開発事業者から資金を得ることを悪とする発言を聞いたが、霞を食ってデータは集まらず、掛け声に終始することになる。欧米では NGO が研究所を持ち、政策決定者にデータに基づいた提言を行っている。どちらの道を選ぶか、協会の役割と目指すべき方向を再考する時期を迎えたと思う。同時に、これまでに各種事業に対して、掛け声以外にどのような具体的な提言をしてきたか、振り返ってみる価値はある。